

陸上自衛隊を支える第3の柱！ 最先任上級曹長

最先任上級曹長(師団等以上)集合教育 〈陸上自衛隊幹部学校〉

陸上自衛隊の最高学府である陸上自衛隊幹部学校(学校長・深津孔陸将一黒)で行われる課程には、指揮幕僚課程・技術高級課程・幹部高級課程の他に師団等最先任上級曹長集合教育がある。これは、准曹士の最上位職及び師団長等の補佐者として、上意下達・下意上達の補佐及び准曹士の育成に必要な資質・職能を修得させる事を目標としている。

集合教育は約11週間行い、精神教育・服務及び防衛教養・職務分析と問題解決法等の総合実習・その他となっている。前半に必要な知識及び技能を修得し、後半で問題解決実習等を行い、最重視している職務分析(最先任上級曹長として何をすべきかを明確化)による問題解決能力の素地を付与するとともに、最先任上級曹長としての“覚悟”も付与することも狙いの一つである。

陸上幕僚長の訓話に始まり、幹部学校長初め学校関係者の訓話、統幕最先任下士官・陸自最先任上級曹長・海自先任伍長・空自准曹士先任及びOB含め各講師による講話等、部隊には聞けない話を聞く。また、カウンセリングやスピーチの技法を学んだり、各種現地や各種職学校研修で見識を深めている。

現在12期までの186名が教育を修了しており、将官を長とする部隊等の最先任上級曹長の93%が教育修了者である。

第12期最先任上級曹長集合教育

平成27年11月4日より15名が入校し集合教育を受けた。入校して1週間経った日、統幕の宮前最先任、海自関先任伍長、OBで第3代陸自最先任上級曹長の清水氏の講話があった。「最先任としての生き様を見せる」「習うと学ぶは違う。習うは身につける事で、学ぶは知識をつける事。色々な経験の中で習ったことを、それを自分でどうするか」「准曹士に気付きを教える事が大切」「やり甲斐だけでは人は動かない」などの話を熱心にメモをとりながら聞いていた。

教育修了間際の1月下旬、15旅団・在日米海兵隊・南西混成団及び戦闘戦史の研修に沖縄に行った。「現地教育の素晴らしさを知った」「現地に来て感情や雰囲気は少し理解した気がした」「現地を見ると地形を上手く使っていると思った」「指揮官の補佐は現場を知っていないと出来ない事もあると思う」などとの感想が聞かれた。



幹部学校内で米軍による講話



米海兵隊下士官学校研修



統幕最先任 宮前稔明准海尉による講話



海上自衛隊先任伍長 関 秀之海曹長による講話



第12期 最先任上級曹長集合教育
課目 部外講話
時間 1630 ~ 1710
教官 清水氏

最先任上級曹長とは…

部隊における准曹士の最上位で指揮官に直轄的に運用される補佐者の事。准曹士全般に係る指揮官への意見提出や情報提供、准曹士に対する指揮官企図の徹底を行う他、准曹士の育成、特に人事及び教育訓練に係る業務の実施を行う。

上・下級部隊等及び他部隊等の最先任上級曹長との連携により上意下達・下意上達を可能とする「准曹士ネットワーク」を確立する。

指揮官・幕僚そして第3の柱は最先任上級曹長であり、部隊や機関になくなくてはならない存在となっている。

上級曹長制度

上級曹長制度は、准陸尉及び陸曹(准曹)の能力を最大限発揮できる職を設けることにより、准曹による効果的な指揮官の補佐や自らによる准曹士の育成、目標の明確化を目的としている。それらの目的を達成するため、部隊や機関に最先任上級曹長や先任上級曹長がいる。最先任上級曹長は連・大隊以上の指揮官を補佐する准曹のトップである。



岩田陸幕長の訓話

陸鬼ロゴマーク

陸自を支える第3の柱として最先任上級曹長の重要性を認識するために制定した最先任上級曹長集合教育のロゴマーク。仏を守る四天王の1人である増長天(ぞうちょうてん)をモデルとした。



授業の一環 報告場面(右は深津学校長)

最先任上級曹長集合教育を終えて

本教育は、自己の感覚を研ぎ澄まし、意志力を鍛えてくれたものと感じます。私達は、同じ想いを持って教育に臨みますが、部隊の規模や隊員と関わる内容は千差万別です。その同期15名の最先任とその候補者が、様々な課題を検討する事は、多くの相乗効果を生み、これまでに無い広く柔軟な思考と感性が培われたと思います。(第12期副学生長 三浦達也准尉)



南西航空混成団研修